

池田充宏, 古藤高良, 古藤昭子, 丁宗鐵, 荒川和男, 『黄連解毒湯の運動負荷ヒト体温に及ぼす影響』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 5, No.3, 454-455, 1988.

—黄連解毒湯はヒトにおいて運動負荷時の心拍数、直腸温及び腹部温の上昇に抵抗する作用とともに心血管系に対する作用及び運動負荷に対する主観的強度に多様な影響を及ぼすことが認められた。しかし、投与量による差は認められなかった。

横田広夫, 金沢寛, 安藤邦澤, 平山殖, 西崎弘之, 神山洋一郎, 抄『小児アトピー性皮膚炎に対する、ツムラ消風散、ツムラ黄連解毒湯、ツムラ小柴胡湯合方による治療経験』, 和漢医薬学雑誌, Vol. 6, No.3, 298, 1989.

日笠久美, 羽竹勝彦, 日笠穰, 菱田繁, 抄『黄連解毒湯の各成分における血管弛緩作用』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 8, No.3, 248, 1991.

何の-着-の

大熊守也, 抄『尋常性座創に対する十味敗毒湯、黄連解毒湯の効果』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 8, No.3, 298, 1991.

尾辻和彦, 太田好次, 永田稔, 篠原力雄, 石黒伊三雄, 抄『黄連解毒湯エキス経口投与による Compound 48/80 惹起胃粘膜障害の抑制効果について』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 8, No.3, 332, 1991.

セロトニン分泌を促す。

太田好次, 佐々木恵美, 永田稔, 石黒伊三雄, 抄『黄連解毒湯エキス経口投与による急性四塩化炭素肝障害の改善効果について』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 8, No.3, 344, 1991.

池田充宏, 古藤高良, 丁宗鐵, 古藤昭子, 抄『漢方薬黄連解毒湯が運動負荷体温に及ぼす影響について—特に、運動強度との関連について—』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 8, No.3, 532, 1991.

吉永真也, 木村雅人, 田中彰, 朝長正道, 『黄連解毒湯の慢性期脳血管障害の臨床症状と脳血流量に及ぼす効果』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 9, No.1, 22-27, 1992.

—著者らは脳血管障害慢性期症例に黄連解毒湯を用い、臨床症状と平均動脈血圧及び脳血流量の変化を検討した。黄連解毒湯投与後、平均動脈血圧は有意に下がったが、半球血流量は上昇か不変であった。このことは脳血管障害症例では高血圧コントロールにおける血圧下降が脳血流量を減少させ、症状の増悪を招く危険があることから、理想的な降圧剤のひとつである。臨床症状は脳出血症例3例全例で、脳梗塞7例の内3例で、精神、自覚症状の改善をみたが、神経症状は改善していなかった。このような脳血流量と臨床症状の改善の不一致は、広範な脳循環代謝障害が神経症状といった局所症状よりも自覚症状や精神症状といった非局所症状の原因となっていることを示唆しているのかもしれない。；従来の脳循環代謝改善薬の臨床効果が脳出血よりも脳梗塞で強調されているのに反し、黄連解毒湯の脳出血に対する効果は特異的である。長谷川も黄連解毒湯の有用性は、頭蓋内出血が脳梗塞や一過性脳虚血発作よりも高いとしている。つまり、長澤らが言うように、脳循環改善作用よりもむしろ脳代謝賦活作用が強いのかも知れない。

尾辻和彦, 太田好次, 篠原力雄, 石黒伊三雄, 『Compound 48/80投与ラットの胃粘膜障害に対する黄連解毒湯エキス経口投与の影響』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 9, No.2, 101-109, 1992.

一著者らはCompound 48/80惹起胃粘膜障害に対するOGTエキスの抑制効果を明らかにする目的で、Compound 48/80を4日間連続腹腔内投与したラットにOGTエキスを併用経口投与し、この漢方薬の胃粘膜障害に対する影響を潰瘍の面積、脂質過酸化、活性酸素の消去に關与する酵素の活性などを指標として調べた。Compound 48/80を1日1回、4日間投与したラットへのOGTエキスの経口投与は、惹起された胃粘膜障害を抑制したばかりでなく、その障害された胃粘膜組織でみられたLP0レベルの上昇並びにSOD、catalaseおよびGSH-pxなどの酵素活性の低下を抑制した。また、この傷害された胃粘膜組織のXOD活性の上昇がみられたが、この活性上昇は、OGTエキスの経口投与により抑制され、しかもこの上昇した本酵素活性はin vitroにおいてもOGTエキスによって阻害された。これらの結果より、Compound 48/80惹起胃粘膜障害の発症・進展に胃粘膜組織のキサンチン-XOD系におけるO₂⁻生成の亢進を抑制し、その組織のLP0レベルの上昇とSOD、catalase、GSH-pxなどの活性酸素の消去に關与する酵素の活性低下を抑制していることに基づいていると推察された。

藤田興, 池亀守, 坂本秀生, 葛谷博敏, 『黄連解毒湯によるPC12細胞の神経様突起形成作用』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 9, No.2, 118-125, 1992.

日笠久美, 羽竹勝彦, 日笠穰, 菱田繁, 短報『黄連解毒湯及び各構成生薬における血管弛緩作用』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 9, No.2, 169-174, 1992.

尾辻和彦, 小林隆, 太田好次, 篠原力雄, 永田稔, 石黒伊三雄, 『Compound 48/80惹起胃粘膜障害抑制効果に及ぼす経口投与時間の影響』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 9, No.3, 229-235, 1992.

小林隆, 尾辻和彦, 太田好次, 永田稔, 石黒伊三雄, 『黄連解毒湯エキスのCompound 48/80惹起胃粘膜障害抑制作用』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 10, No.3, 222-230, 1993.

小林隆, 尾辻和彦, 太田好次, 永田稔, 石黒伊三雄, 『Compound 48/80惹起胃粘膜障害の進行に対する黄連解毒湯エキスの抑制効果. 半夏瀉心湯, 六君子湯および胃苓湯エキスとの比較検討』, 和漢医薬学雑誌 Vol. 11, No.2, 123-133, 1994.

一1回のCompound 48/80(肥満細胞の脱顆粒薬)投与ラットでの胃、粘膜障害の進行に対するOGTエキス経口投与による抑制効果をHST、RTおよびITエキスの経口投与の場合と比較検討し、OGTエキスは他の漢方原末エキスよりも強い抑制効果を示し、またITエキスは有意な抑制効果を示さないことが明らかとなった。しかも、この胃粘膜障害の進行に伴ってみられる胃粘膜組織のLP0(過酸化脂質)の増量、Se-GSH-px(Se含有グルタチオンパーオキシダーゼ)の活性低下、MPO(ミエロパーオキシダーゼ)の活性上昇などの亢進に対する抑制効果はOGTで最も強く、次いで、HST、RT、ITエキス投与の順であったが、この胃粘膜障害に伴う胃粘膜組織のXOD(キサンチンオキシダーゼ)の活性上昇の亢進はOGTエキスでのみ抑制された。In vitroでOGT、HST、RTおよびITエキスのO₂⁻(スーパーオキシドアニオン)と・OH(ハイド

八味丸加黄柏

12月
便秘の女子人... 黄連解毒湯
3人... 便秘除隔散科

黄柏
下血の瀉散

ロキシルラジカル)の消去活性を調べた結果、 O_2^- 消去活性はOGTエキスが最も強く、次いでHST、RT、ITエキスの順であったが、 $\cdot OH$ 消去活性はOGTエキスが他の漢方薬原末エキス比べて非常に強かった。In vitroでOGT、HST、RTおよびITエキスのラット胃粘膜組織のXODとMPO活性に対する阻害を調べると、XOD活性はOGTエキスでのみ阻害されたのに対し、MPO活性はOGTとHSTエキスで同程度に阻害され、しかも両エキスの阻害効果はIn vitroとIn vivoにおいてラット胃粘膜組織のSODとCAT(カタラーゼ)活性に対して影響を示さなかった。これらの結果から、Compound 48/80投与ラットでの胃粘膜障害の進行に対するOGTエキス経口投与による抑制は、このエキスのXOD阻害作用、脂質過酸化抑制作用、MPO阻害作用、活性酸素消去作用などに基づいていることが強く示唆された。

祝部大輔, 佐藤慶祐, 短報『薬物誘発性ストレスに対する黄連解毒湯の効果』, 和漢医薬学雑誌Vol.11, No.3, 264-267, 1994.

—黄連解毒湯は、正常マウスの自発運動量には影響を与えず、TBZストレス負荷マウスに対して自発運動増強作用が認められ、疲労回復効果が期待できることが示唆された。

祝部大輔, 佐藤慶祐, 『黄連解毒湯エキスのtetrabenazine 負荷における自発運動量および自発脳波に対する影響』, 和漢医薬学雑誌, Vol. 11, No.4, 440-441, 1994.

—黄連解毒湯は、tetrabenazine ストレス負荷マウスに対して自発運動増強作用が認められ、疲労回復効果が期待できることが示唆された。また、慢性植えこみ電極ウサギを用いた自発脳波に対する作用は黄連解毒湯の治療用量では全く影響を受けなかった。

～日本東洋医学雑誌～

相見三郎, 『老人性ボケ(恍惚病)の治療』, 日本東洋医学雑誌, Vol.25, No.4, 63-, 1975.

桑木崇秀, 『高血圧ラットに対する黄連解毒湯並に二三生薬の効果について』, 日本東洋医学雑誌, Vol. 29, No.3, 1-, 1978.

黄連解毒湯

〔原典〕 『外台秘要』 卷第一。傷寒。
崔氏方

022 黄連解毒湯

〔因〕 外台秘要方 (卷一 崔氏)

黄芩	3.0
黄連	2.0
山梔子	2.0
黄柏	2.0

〔本義〕

前軍督護劉車なる者、時疫^{じえき}を得て三日、已^{すで}に汗し解す。飲酒に因^よって復た劇しく苦しむ。煩悶、乾嘔、口燥、呻吟、錯語し、臥するを得ず。余思^{おも}いて此こに黄連解毒湯を作る。(略) 一服を服し目明らけし、再服して粥を進む。此こにおいて漸く差^さゆ。余療するに、凡そ大熱盛んにして、煩嘔、呻吟、錯語し眠りを得ずを以てするに、皆佳し。語り伝えて諸人之れを用いて亦効す。此れ直ちに、熱毒を解し、酷熱を除く。必ずしも飲酒にて劇しきにあらず。此の湯にて療するに五日中に神効す。猪肉冷水を忌む。

〔解説〕

時疫 (流行性の感染症) にかかり、発汗後治っていたが、3日目に飲酒後ぶりかえした。じっとしてられないくらいの状態で、からえずき (吐物のない嘔吐)、口の乾燥、うめき、言葉もまとまらず、横になることも出来なくなった。そこで黄連解毒湯を服用させたところ一服で大分良くなり、二服目の後、粥を取り、やっと治った。

その後、体表の熱が強く、嘔吐し、軽度の意識障害を思わせるような症状に用いて奏功している。

飲酒がきっかけにあるとは限らない。服用後5日以内に改善する。

以猪膽灌下部用亦立通張仲景傷寒論云猪膽和法醋少許灌穀道中
又前軍督護劉車者得時疾三日已汗解因飲酒復劇苦煩悶乾嘔口燥呻吟錯語不得卧余思作此黄連解毒湯方
黄連^三 黄芩^三 黄蘗^{各二} 梔子^{十四}
右四味切以水六升煮取二升分二服一服目明再服進粥
於此漸差余以療凡大熱盛煩嘔呻吟錯語不得眠皆佳傳
語諸人用之亦效此直解熱毒除酷熱不必飲酒劇者此湯
療五日中神效忌猪肉冷水

15 黄連解毒湯 (おうれんげどくとくとう) (肘后方・外台)

黄連・黄柏各一・五 黄芩三・〇 梔子二・〇 (回春はさらに柴胡三・〇 連翹・芍薬各二・〇を加える)

〔応用〕 実熱を治する処方、熱性病の急性期に用いるが、実熱の慢性化した雑病にも用いられる。

本方は主として吐血・咯血・衄血・下血・血尿・麻疹・痘瘡・皮膚病・皮膚癢痒症・蕁麻疹・諸熱性病の残余熱に用いられ、また狂躁症 (喜笑やまざる症)・血の道症・めまい・心悸亢進症・ノイローゼ・精神病・脳溢血・高血圧症・酒渣鼻・黒皮症等に広く応用される。

〔目標〕 三焦 (上中下の三焦) の実熱によって起こる、炎症と充血をともなった諸症を治するのが目標である。小柴胡湯類の半外半裏の熱でもない一種特異の遷延熱を解するものである。実証で腹に力があり、脈も十分力がある、熱はあるが沈の傾向を帯びたものである。

一般雑病のうち炎症と充血のため顔色赤く上衝し、不安焦躁・心悸亢進の気味があり、出血の傾向を有するものを参考として用いる。

本方を不眠症に用いるときは、頭がさえてなかなか眠れない。気分が落ちつかず、つまらないことが気にかかる、いらいらする、のぼせるというようなことを目標にする。高血圧症や更年期障害のときの不眠にこの症がある。

〔方解〕 構成薬物の四味は、みな苦味寒冷却熱の剤で、しかもそれぞれ特有の作用をもっている。黄連と黄芩は炎症充血を去り、心下の痞えと不安を治し、山梔・黄柏は消炎に利尿をかね、黄連・黄芩と協力する。さらにこれを分けて説明すると、黄連が主剤であって、黄連は心と脾胃の熱を解して不安焦躁を鎮静させ、黄芩は肺や大腸・小腸の熱を解し、咯血・吐血・下血等を治し、黄柏は腎・膀胱の熱を解し、利尿作用があり、血尿などを治し、山梔は肝・心包・三焦の熱を解するものであるとされている。柴胡を加えると、肝・胆の熱を解する作用が強化されるものである。これらの熱による諸炎症充血を治し鎮静させるものである。

〔合方〕 温清飲は黄連解毒湯と四物湯とを合わせたもので、病症がさらに慢性化し津液が枯れ、皮膚も乾燥し、滋潤によって血熱を解する必要があるときには、この温清飲としなければならない。慢性症にはしばしばこの方が用いられる。

大塚敬節氏は高血圧症で、のぼせ・顔面紅潮・不眠・気分不安定などのとき、本方に釣藤・黄耆・魚腥草 (どくだみ) を加えて用いるという。

黄芩3, 黄連・梔子各2, 黄柏1.5 (g)

【症状治療】 種々の炎症・出血・かゆみ止めとして用いられる。宿酔の頭痛やのぼせに用いる。

【長期使用】 高血圧, 免疫異常, 血行障害などに用いられ, 非常に応用範囲の広い処方である。かゆみなど皮膚・粘膜の炎症, 胃炎, 胃潰瘍, アフタ性口内炎, 血管炎, 肝炎, 胆嚢炎などに用いられる。諸出血 (吐血, 衄血, 血尿, 子宮出血, 下血, 血膜出血, 眼底出血, 脳出血), 神経症, 血管性痴呆, アルコール性肝障害などに用いられる。近年特にアトピー性皮膚炎, 蕁麻疹, 尋常性乾癬など皮膚疾患に用いられる。高血圧の管理や脳血流の改善薬として長期的に使用される。「恍惚」に対する薬として古来より精神症状に頻用されてきた名処方でもある。

高血圧の頻用処方

第1選択剤

まず以下の4処方から選択する。

■壮年の本態性高血圧 (ストレス性)

黄連解毒湯 顔が赤いこと (のぼせ, イライラ, 焦燥感, 易怒性興奮), 便秘傾向を参考にする。
おうれんげどくとう

皮膚疾患の頻用処方

黄連解毒湯
おうれんげどくとう

一般に構成生薬が少ないほど切れ味がよいといわれる。本方は抗炎症作用を期待する場合の第1選択剤といって過言ではない。

本方使用にあたって注意することは2つある。1つは本方で下痢をする人がいること。山梔子には genipin, geniposide といった瀉下活性のあるものがあるが, 臨床的にはいわゆる実証タイプの人でも黄連, 黄柏で下痢することがある。もう1つは, 本方は皮疹が極端にカサカサしている場合には適さないことである。本方は漢方的には湿を乾かす作用があるからである。

逆にいえばこの2点に気をつければ大過ないといってよいと思う。また, カサカサしていても, 赤みの強い炎症性皮膚炎では一時的には第1選択剤として用いることが多い。

〔40〕高血圧と不眠に黄連解毒湯

六十四歳の女。五年前より高血圧症と不眠に悩んでいる。それに便秘の傾向がある。

やや肥満しているが、胸脇苦満も腹直筋の緊張もない。初診時の血圧一八六―一八〇。

黄連解毒湯をあたえ、アドルムとカスカラをやめることにする。ときどき眠れないことがあるが、アドルムの厄介にならずにすむ。血圧も最高が一八〇を越すことはない。

その間、箱根に出かけて御馳走が過ぎたのか下痢をして、半夏瀉心湯を飲み、翌年の正月になって、かぜから咳がひどくなって麦門冬湯を飲んだことがあるが、その他は黄連解毒湯をつづけた。これを飲んでみると、安眠もでき、気分もよい。旅行する時は黄連解毒丸を持参する。この頃は血圧も一六〇内外で、最低は八〇ぐらいである。

黄連解毒湯は『外台秘要』に出てくる薬方で、黄連、黄芩、梔子、黄柏の四味から成っているが、この患者には、これに大黄を加えて用いた。

『症候による漢方治療の実例』の「不眠」のところ、私は次のように述べた。

「頭が冴えてなかなか眠れない、気分が落ちつかず、つまらないことが気にかかる。イライラする。のぼせる。黄連解毒湯はこんな傾向の不眠に用いる。そこで高血圧症、更年期障害などのときにくる不眠に用いる機会がある。このような症状のもので便秘の傾向があれば、三黄瀉心湯にするか、黄連解毒湯加大黄とする。

黄連には、充血を去り興奮をはずめる効果があるので、黄連阿膠湯や甘草瀉心湯その他黄連の配剤せられた処方を不眠に用いることがある。梔子には充血を去り煩躁をはずめる効果があるので、梔子だけを不眠に用いることもあり、不眠に用いる処方の中には、この梔子を配剤したものがあ

147 俗にいう笑い中風

私が漢方で開業した当初からの患者であるT家の主婦が、とつぜん脳出血で倒れた。いまから二十年前のことである。

当時、この婦人は五十四歳であった。私が往診した時は、右半身が不随で、言語が渋滞して、ろれつが廻らなかったが、しきりに笑ってばかりいた。いま、その時の記載がないので、血圧がどれだけあったか忘れた。

私は笑うという症状を目標にして、黄連解毒湯を与えたが、二週間ほどで、半身不随がよくなり、それきり、今日まで薬らしいものはのまないが、とても元気で働いている。

せんだって、二十年ぶりで、血圧を測ったら最高一五六―最低九八であった。患者は別に苦しいところはないから、薬はいらないという。まことに幸福な人である。

148 更年期障害

患者は、四十九歳の色の白い中肉中脊の婦人である。ある夜、とつぜん、はげしい動悸がして、びっくりして医師をよんだ。しかしどこもわるくないと言われた。ところが、この動悸は、その後も、ときどき起った。その頃から、のぼせが強くなり、耳鳴が起り、不安、不眠を訴えるようになった。それに一日に何回となく、かっとならだ中があつくなり、汗が流れる。大便秘結する。月経は五ヵ月間とまっている。

私は、この症状をきいただけで古人が血の道症とよんだ更年期の症状であると診断し、黄連解毒湯を与えた。患者は、これをのむと気分が落ついて、たいへん楽だといって昭和二十七年九月十日からその翌年の三月までのみつづけた。これをしばらくのまないでいると、のぼせと不安、不眠が起ってくるという。ところで同年五月二十三日、患者はとつぜん往診を依頼してきた。急いで往ってみると、ひどいめまいで、眼をつむっていても、ぐるぐるまわって、気分がわるくてたまらないという。血圧を測ってみると最高一六六―最低九六であった。しかし私は処方を変更せずに、前方を与えた。三日ほどたつと、めまいはやんだ。血圧を測ると、最高一三二―最低八八であった。

私は患者に、更年期には、感情がたかぶり、そのため血圧の変動がはげしいが、心配しないようにと言いきかせた。その後、患者は、だんだん前記の症状を忘れるようになり、精神状態も安定した。

149 口唇と口腔内の潰瘍

患者は六十三歳の男子。昭和六年五月頃から、口唇の表皮が少し剥けていたが、自覚症状がないので、そのままにしていた。六月もすぎ、七月になったが、まだよくならないので、薬局で薬を買ってきてぬった。八月になっても依然としてよくならない。そこで少々気にかかるようになった。その頃から医師にかかり始め、昭和七年の二月、私の診察をうけるまで、種々雑多の治療をくりかえした。その間レントゲン治療、ラジウム治療、人工太陽光線などの治療をうけて、都下の病院を歴訪した。そしてついに、最後に下された診断は、口唇癌になるかもしれないということであった。

診ると、下唇の左半分は長さ1cm、幅0.3cmの浅い潰瘍がある。周囲はさほど硬くもないし、出血もない。刺戟性の飲食物をたべるときに、少し痛むほか、自覚症状もない。ところで、口腔内をみると、舌も、頬の内面も、左側は、ところどころ赤くなって、ただれている。しかしこれらの部位もほとんど痛まない。

私は、これに黄連解毒湯を与えたが、一週間分、大いに軽快し、三週間分の服用で、全治した。

黄連解毒湯は、習慣性に口内炎を起している人や、ペーゼット氏病で、口内に潰瘍の起きている人などによく効く。このような場合には、数ヵ月から、一カ年ぐらいつづけてのんでみると、すっかり全治して、潰瘍ができなくなる。